



高が趣味されど趣味

株式会社ケルク電子システム 代表取締役会長 仲 良二



今回で「リレートーク」原稿の依頼を受けたのは4回目になります。

最初は2002年爽秋号「ヘッドライト・テールライト、1997年世界ラリー選手権第14戦RACラリー」出場記です。内容はイギリスウエールズ地方で開催された世界三大ラリーの一つです。因みに後二つはサファリラリー、モンテカルロラリーです。

2回目は2007年爽秋号日本初のWRC（世界ラリー選手権）「ラリーJAPAN」です。我が国の自動車産業にとってラリーに勝利することが販売政策に重要な時代がありました。特にヨーロッパ市場においてモータースポーツの一つであるラリーに勝利することが販売促進として有効な手段でした。

古くはラリーのニッサンと言われた「栄光への5000km・サファリラリー優勝」始め、WRCではスバル・三菱が活躍した時代がありました。ラリーで勝利することは耐久性・信頼性・高性能を実現するために走る実験室と言われ、戦後ヨーロッパの車を輸入して技術を学び、世界の自動車王国の一端となりました。

WRCは2004年日本で初めて北海道で開催されました。そのラリーJAPANに出場が出来ました。その時の帯広の沿道20万人観衆の声援は今も脳裏に残っています。

3回目は「2019年ラリーモンテカルロヒストリック」です。ラリーモンテカルロはラリーで一番歴史が古く1911年に始まりました。このラリーはヨーロッパ各地からモナコに集う「コントラシオン」として、モナコから1000km以上離れた各都市から数日かけてモナコに集う一大イベントでしたが、長距離を走行するのは1995年に廃止され、現在のWRCラリーモンテカルロは距離を短縮して開催され、3日間で約1200kmを走る競技になりました。その後1997年にラリーモンテカルロヒストリックとして、分離うけつなげられました。

現在のラリーモンテカルロヒストリックのスタートは、パルセロナ、アテネ、ドイツ、フランス、ミラノです。最長はイギリスグラスゴーが最長で全走行距離ゆうに3500kmを超えます。しかも車は50年を経過した年代物が多く、私はモナコスタートでこのラリーに参加しました。



2019ラリーモンテカルロヒストリック

我々のチーム轟は、東京大学とホンダテクニカルカレッジ関東の2校が授業の一環として学生による参戦プロジェクトで、東京大学の掲げる国際化教育とタフな東大生を育成する場として、又、ホンダテクニカルカレッジの学生と分担して1970年製のポンコツ状態のスバルFF-11300Gを見事に蘇る作業が学生の仕事でした。当時の車は部品もなく車検をとることは大変な苦労があったと思います。ラリー競技の実践サポートやサービスは、徹夜での走行や競技車の燃料補給整備等、普段経験できない苦労があり、ゴールではドライバーと学生は同等の達成感と感激を味わうことが出来ました。モナコでの豪華なホテルと盛大なガラパーティーは忘れることはできません。

以上は過去3回の内容です。私のラリー歴で過去3回の出場記は1997年以降の話です。

1965年京都産業大学へ入学して1か月余りで自動車部を創部し、私が最初に出場した当时有名なラリー第9回日本アルペンラリー1967年(昭和42年)に挑戦しました。

1965年鈴鹿サーキットで開催された第1回日本グランプリレースより前の1959年(昭和34年)に開催された第1回日本アルペンラリーは日本の自動車産業発展に欠かせないモータースポーツであると言っても過言ではないと思います。当時の自動車メーカーはそのレース、ラリーに勝つことが車の開発や宣伝の効果と考えて必死に挑戦していました。

当時モータースポーツの最高峰に20歳で出場しました。但しラリーは28歳の防犯設備業開業(今年で創業49年)と結婚の為、止めざるをえないこととなりました。そしてラリー活動を休止して25年ぶりに出場したラリーが2002年爽秋号「ヘッドライト・テールライト、1997年世界ラリー選手権第14戦RACラリー」50歳の出場記です。その後2004年「ラリーJAPAN」57歳、2019年「ラリーモンテカルロヒストリック」72歳、そして2023年全日本ラリー選手権・新城ラリーにヒストリッククラスにラリーモンテカルロヒストリックに出場したスバルFF-1(1970年製)で優勝しました。その後2023年も新城ラリーに二連覇をしました。

FIA世界ラリー選手権日本ラウンドは第1回2004年北海道十勝地方で開催されて私も参加致しました(2007年爽秋号リレートーク)。6回(2010年)まで北海道で開催されて、12年後第7回が愛知県・岐阜県で開催され、2023年WRCラリーJAPANに出場して、ヒストリッククラス・クラス3位に入賞しました。

このラリーは地上波放送で放映され多くの方々がご存知と思いますが、トヨタがWRCに復帰し、又、トヨタのワークスドライバーとして勝田貴元が活躍して関心度が高まりました。ラリーはトヨタスタジアムのスーパースペシャルステージを始め、愛知県・岐阜県の山間部で峠道のターマック(舗装路)をスペシャルステージ(6km～12km)を全力でタイムアタックをする競技でした。



2004北海道ラリーJAPAN



2023ラリーJAPAN

私のラリー歴は20歳代に50戦位参加し、50歳代2戦、70代から4戦と人生の後期を楽しんでいます。陸上競技ではマスターズがあり、90歳代の100m競技トップの方が報道されたりしていますが、ラリーは車の製造年のクラス分け程度でドライバーの年齢別はありません。高齢者ドライバーの問題がよく報道されています。私の自論ですが高齢者でミッション車を運転出来ない人は車を運転しないでください。高齢者の技能講習でミッション車運転の検定をすれば、今のオートマチック車の悲惨な事故は無くなります。

「Fun to Drive・データーが運転を楽しくする」トヨタがテレビのコマーシャルで宣伝のキャッチです。豊田章男会長が日本のモータースポーツ界にかなりの貢献をされています。自らもハンドルを握り草の根のモータースポーツにも挑戦されています。

山道を全開で走り全開でブレーキを踏み限界でコーナーを回る楽しみ、一つのコーナーで0.何秒詰めるか、車と一体になり、操り安全に走りゴールを目指す。例えば競争する車と負けていても、相手が故障や突きささる(ラリー用語で道路から落ちる事)ことがあります。自分との戦いで完走し結果勝利することができるのがラリーです(仲間の格言「ラリーは参加して家に帰るまでがラリー」)。

篠塚健次郎(パリダカ優勝、日本人初WRC優勝2024年3月逝去)は私と同期にラリーを始められ「生涯現役」で2019年ラリーモンテカルロヒストリックも一緒にチームでした。

ラリーは人生の原点です。「何事もあきらめない」はラリーから学びました。

今丁度(2024年5月18日～6月23日)北京・パリ14000kmをクラシックカーで37日間で走る競技が開催されています。おとこのロマンです。ヨットで太平洋を横断する方もみんな冒険の旅を一生続けたいものです。